



JIC インフォメーション

第 237 号 2026 年 1 月 10 日
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行
1 部 500 円

発行所: JIC国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NSビル 5 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



あけましておめでとうございます

今年も **JIC** をよろしくお祈いします!!

С НОВЫМ 2026 -ым Годом!!

ロシア・旧ソ連
国際交流誌



(写真) モスクワのクリスマス・新年風景

<本号の内容>

- 恒例のスタッフ新年あいさつ……テーマは「10年後の夢」…………… 2-11P
- 徳山あすかのモスクワ生活…ペテルブルク弾丸旅行 ……………… 12P
- こんな時代にロシア語のすすめ (連載第 14 回) …黒田龍之助…………… 16P
- ロシア語映画発掘上映会 20 回の軌跡……………守屋愛…………… 19P
- 日口極東学術交流シンポジウム、ほか………………………… 21P

Jクラブ(JIC友の会)会員募集中。年4回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

謹賀新年！

JICスタッフより新年のご挨拶

本年もよろしく願いたします



毎年1月号恒例のスタッフ新年あいさつです。ジェーアイシー旅行センターは今年で会社設立40周年を迎えます。JIC国際親善交流センターの対ソ連・ロシア交流を実務面で支えるため、上田卓三会長の指示で会社が設立されたのは1986年4月のことでした。青年交流や教育交流、平和交流の旅行手配から始め、ソ連船クルーズの受入れ、ロシア語私費留学やホームステイ交流などに手を広げ、ロシア・モンゴル・中央アジアなど旧ソ連地域専門の旅行会社として実績を重ねてきました。この間、リーマン・ショックや東日本大震災、新型コロナ・パンデミックさらにはウクライナ戦争と、度重なる困難の荒波に揉まれながらも、何とか会社を維持し旅行業務・交流事業を続けることができたのは、ひとえにJICを応援して下さる多くの皆様のご支援と、会社を支えてくれるスタッフたちの献身のおかげです。今後50周年、60周年と会社が続くことを期待して、今年のテーマは「10年後の夢」としました。JICスタッフのそれぞれの夢、日頃の思いや小さな気づきを味わってみてください。

JICは、日ロ市民交流を支える社会インフラとなるべく、ロシア旅行・ロシア語留学・日ロ文化交流に邁進する決意です。本年も、ジェーアイシー旅行センターおよび国際親善交流センターをよろしく願いたします。

ロシア・ウラジオストク再訪と 現地で見た新しい国境管理

杉浦 信也(ジェーアイシー旅行センター代表取締役)

昨年は、ウラジオストク1回、モンゴル・中国へ2回と、私にしては珍しく海外出張が多い一年でした。中でも特に印象に残ったのが、9月にハルビン経由で2年ぶりに訪れたウラジオストクでの入国手続きです。ロシアでは2024年12月からモスクワのシェレメチェヴォ空港など4空港で、指紋と顔画像の採取が始まり、2025年6月からは全ロシアの国境地点で実施されるようになりました(ベラルーシ国籍者を除くすべての外国人が対象。ロシア政府令 No.1510)。

ロシアで始まった入国時の生体情報採取制度

今回は制度開始後初めてのロシア入国でした。空港のパスポートコントロールで、私を含む数名の外国人が審査場横の椅子で待機するよう指示され、その後個室に案内されました。そこで審査官から入国目的を確認され、別の係員によって顔写真と指紋の採取が行われました。モンゴルや中国でも同様の採取はありますが、そちらは自動化された最新システムが整っています。一方、ウラジオストクでは古い機材が使われていて、審査官が手で指の角度を調整するなど、かなり昔ながらの方法でした。ロシア全土の国境地点の全ての入国審査のブースにわずか半年ほどで最新設備を導入するのは難し



ハルビンからウラジオストクへ、アエロフロート機内の様子

く、結果として空港に1台しかない装置を個室で一人一人順番に使う形になっているようです。現場の国境警備の方々も急な制度変更に対応しなければならず大変そうです。

※注:外国人を対象とした指紋・顔画像採取は、日本でも入国の際にテロ対策や不法入国の防止を目的とした出入国管理法の改正により2007年から実施されています。

さてさて、入国審査を終えて到着後約1時間で同行の旅行者とともに空港を後にしました。2年ぶりのウラジオストクは街並みも変わらず、金角湾クルーズやルースキー島の水族館でイルカショーを楽しむことができました。

日露の往来と2026年のJIC活動

2025年1~11月には、過去最高となる18万6,700人のロシア人が日本を訪れたそうです。一方、日本からロシアへの

渡航者は、ロシア国家統計局によると昨年9月までで約4,000人にとどまっています(コロナ禍前年の2019年は11万2,000人の日本人がロシアを訪問)。



(上)金角湾クルーズ、(下)ルースキー島水族館のイルカショー

私たちJICもインバウンド事業の比重が年々高まっていますが、ロシアへの留学生派遣や短期語学グループ研修、少人数のロシアツアーなども継続して実施しています。

今年は、かねてから希望者の多いウラジオストク～モスクワ間のシベリア鉄道全線ツアーを再開したいと考えています。外務省の安全情報は依然レベル3(渡航中止勧告)のままですが、安全を確認しながら実現に向けて準備を進めて参ります。ご興味のある方はぜひご参加ください。

※1 ロシア連邦政府令 2024年11月7日 第1510号

<http://publication.pravo.gov.ru/document/0001202411130026>

※2 外務省ロシアの安全情報はレベル3(渡航中止勧告)ですが、但し書きを修正して、ビジネス、留学、人道目的など真にやむを得ない事情がある場合は特別な注意を払うことを条件として渡航・滞在を妨げないとなりました。

https://www.anzen.mofa.go.jp/info/pcinfectionsbothazardinfo_178.html#ad-image-0

※3 JIC ロシア渡航の注意

https://www.jic-web.co.jp/pdf/entry_russia.pdf

「自分で自分をご機嫌に」

小西 章子 (JIC 大阪)

あけましておめでとうございます。

2025年は万博イヤーでしたね。大阪在住なので、足しげく通いました。大阪のおばちゃんのカバンにはほぼミャクミャクがついているというウワサ(冗談?)も聞いたりしましたが、私のカバンにももれなくついております。



開幕日のミャクミャク。大雨で極寒!

2025年、ロシア情勢に目立った良い動きはなく、円安が進み、年末にかけて日中間の航空便キャンセルも相次ぎ、ロシア方面への渡航にはなかなか厳しい状況が続きました。しかし、ロシア旅行、出張、留学をする人は少しずつ増えており、ロシア以外のロシア語圏へもたくさんの留学生を送り出すことができました。とても嬉しいことです。

引き続き、2026年もJICをよろしくお願ひいたします。皆様のお役に立てるよう今年も精一杯頑張ります。

昨年、とある食品関係の企業で料理を作って応募するキャンペーンがあり、応募してみたところ幸いにも賞をいただいた、という出来事がありました。(賞状と、副賞としてその企業の色々な商品の詰め合わせをいただきました^^v)

ふと、大人になってから自分が作ったものに対して賞をいただけることってほとんどないな、この種類の嬉しさは子供の時以来かもと思い、なんとも言えないウキウキな気持ちになりました。そしてそれ以来、自分の中で食事を作ることがこれまでよりも楽しいものになった気がしています。時間はいつも不足気味だし、凝ったものを作っているわけではなく大抵は適当だし、だれに褒められるわけでもないのですが、切羽詰まっている時でも料理することがそんなに苦でなくなりました。週末にレシピを色々追ってみたい、食器を新し

く買おうという気になったり、いろいろとポジティブな変化も感じます。気持ちの持ちようって行動にかなり影響するんだなあと思った出来事でした。

とはいえ、分かりやすく褒めていただけることってそうそうないので、2026 年は、自分で積極的に自分のご機嫌をとって、行動もどんどんポジティブにしていきたいな、と思っています。

「話のネタに」

百瀬 智佳子(JIC 東京)

新年おめでとうございます。

さてこの毎年恒例のご挨拶には何を書くやら、毎年毎年全くもって頭痛の種です。いや皆様にお伝えしたいことがないわけではありません。むしろ積極的にございます。

それは「今年もまた皆様ご無事で楽しい旅をされますように。旅されなくても元気で過ごされますように」という本気の呪文のごときもので、毎度同じ数行で終わるところをあれこれ前置きをつけ字数を増やすのです。……が。そのつけたい、語りたいこと、これが本当でない。何しろ Facebook 全盛期に流行りにのってみたくてページを作ったものの眩きたいことは何もなく、一つもなく、結局一文字たりとも書かずに終わった私。当然ブログも X もやりません。それでいて人様の書いたものは楽しめてしまうので完全に受動一辺倒の人間なのです。

困り果てた私が部屋を見回しネタを探したところ、ロシアの教会の絵を発見しました。昔々にイズマイロボの蚤の市で不要になった手持ちの小物とバスターで貰った写生画です。……これ、どこの絵なのかねえ？ 寄越した本人は「教会だよ」と見りや分かることしか言わず、でも写真系だからして見本があるのではないかしら、想像



もちろん作者不詳

で書くより楽なもの。と、かねての疑問を突如再燃させた私は画像検索を試してみました。結論としては多分モスクワのノヴォデヴィチ修道院で塔もそっくり。しかしドームの色や道や草木は適当に変えたのでしょう。

この世にスマホもない頃からの疑問に答えを得られる日が来るなんて、近頃の検索ツールは凄いですね。皆様も本体がわからず長年手元に置いておいでの何か、今なら分かることがあるかもしれません。話のネタに困られましたらお試してください。それでは皆様、今年もぜひぜひ、お元気で過ごされますように。

「10 年後の夢」

小原 浩子 (JIC 大阪)

今年 4 月がジェーアイシー旅行センターの創立 40 周年ということで、10 年後は自分がどうなっているのかを考えた時に、ふと思いついて過去 10 年ほどの自分のスケジュール帳に何を書き込んでいたのか、何に興味を持っていたのか確認してみました。



2015 年は大阪の仲間が一人また一人と抜けて、自分のふがいなさや力の無さをつくづく知らされた年。

2016 年は息子たちと初めてモンゴルに行き、2017 年には大阪事務所

のあったビルが取

アゼルバイジャンのバクーにてり壊しのため事務所を移転しました。2018 年はロシアでサッカーワールドカップというビッグイベントがあり、イベント手配の難しさの中で TV 取材のコーディネート業務をやり切った年。2019 年は初めてブラゴヴェシエンスクのシベリア抑留者墓参の旅に参加し、それ以外にも 2 度の海外渡航をして、これからロシア旅行を伸ばしていけると期待していた 2020 年にコロナ禍で海外への渡航が厳しく制限されました。その後コロナが明けてもロシアとウクライナの戦争でまともな営業活動ができず、2022 年に税理士法人の総務システム部門に出向することに。2025 年は 6 月に出向を終わらせ、やっと JIC の業務に戻れた年でした。

毎年使っているスケジュール帳には、親切にもこれから 5 年後 10 年後の自身の姿を書く欄が設けられているのですが、子育て真最中の 2015 年 16 年頃は真っ白で、自分が何を指すのか、将来どうなりたいかも書けていませんでした。コロナの時期や出向の時期は手帳に「まったく先が見通せない」と書いてありました (泣)。そんな私が今考える 10 年後の夢はこんな感じ。

ロシアとウクライナの戦争が終われば、ロシアは潜在的な魅力のある地域が多く、宇宙開発や芸術分野では他の国よりも秀でた力を持っているので、芸術関連や学術関連の視察、取材や交流事業、ロシア語留学やバレエや音楽を極めるための芸術留学が大きく伸びても不思議ではありません。10 年後のジェーアイシー旅行センターは、ロシアだけでなく中央アジアやコーカサスへの旅行にも強みをもち、ユニークな企画を考案し、お客様のご希望にこたえられる手配力を備えたス

タッフがいて、旅行も留学もできる旅行会社として、ロシア関係者だけでなく旅行代理店にも広く知られる存在になっているのではないのでしょうか(10年後はすでに私は定年を越えてJICにいなことになっているので、好きなように想像させてもらいました...)。2026年が皆様にとって夢のある年であるよう、祈念いたします。

「旅行の際の下調べ」

竹村 貢 (JIC 東京)

明けましておめでとうございます。インバウンド部の竹村です。

JIC のオフィスがある新宿エリアですが、外国人観光客を新宿御苑、新宿通り、駅でよく見かけるようになりました。

日本政府観光局の統計によると訪日外客数は2024年1月～11月は33,380,260人、2025年1月～11月は39,065,600人と前年より17%増えており、またロシアからの訪日客も2024年1月～11月は93,385人、2025年1月～11月は186,700と倍増しています。

JIC インバウンド部でも団体のお客さんが増え、昨年あるグループのホテルの予約を京都の三条付近で予約しました。このあたりはホテルやお店、レストラン、観光地が多くあり、便利なので予約したのですが、ツアー直前にバス会社から『バスはホテルまで行けません』と言われてしまいました(泣)。私の頭にはすぐに、怒りながらスーツケースを引きずっているお客さんの姿が浮かびあがりました。

東京の観光地ではバスの通行が禁止されている所はあまり聞きませんが、京都では四条通りや河原町通りの一部でバスの通行が禁止されています。そのため、ホテルへ行くにはバスが停められる場所から10分ほど歩くこととなります。お客さんに事前に伝えたので、今回は問題なかったのですが、中には荷物を持って少しでも歩くのは嫌という人もいますので、予約の際に注意しなければなりません。

京都に限らず、旅行する際の下調べは大切なのでみなさんお気を付けてください。月曜日(閉園日)に新宿御苑の門の前で、外国人観光客が残念そうにしている姿を最近をよく見かけます。

では本年もよろしくお願いたします。



帯広で乗馬しました！

「20年！」

五十嵐 真夕 (JIC 東京)

何が20年なんだ？と思いますよね。実は今年2026年4月1日で、私がJICに入社してから丸20年が経ちます。あつと言う間だった気もしますが、20年って長いですよ...。時の流れが恐ろしいです。あの頃生まれた赤ちゃんたちがそろそろ飲酒できる年齢になるなんて。そりゃ8cmのピンヒールを履いて通勤していた私の足元もスニーカーになるはずだわ。

JICに入社してからの20年は、それはまあエキサイティングで、入社直後に臨時会議という名の東京本社 VS 大阪支店のバトルが繰り広げられるわ、諸事情(リーマン・ショック等)によりお給料は一部カットされるわ、しばらくボーナスはないわで、実に色んなことがありました^^v

そして、たくさんのお客様の色々な旅程の手配をさせていただき、自分が実際に行かなくても手配で旅行を楽しませてもらえ、皆様のおかげで濃く幸せな思い出が詰まった20年になっています。今年もそんな思い出をひとつでもふたつでも増やしていけたらいいなあと心から思います。

さて、昨年の新年の挨拶では弾丸日帰り旅行を楽しんでいるという記事を書いたのですが、昨年は久しぶりに単独で宿泊旅行をする機会に恵まれ、9月に2泊3日で北海道に行ってきた。帯広に住む友人が遊びにおいでと誘ってくれたことが旅行のきっかけだったのですが、せっかく北海道に行くんだから、札幌に住む中学時代の友人にも会いたいと思い連絡し無事に会うことができました。友人と会うのは約8年ぶりだったので話にも花が咲き、また札幌市時計台やさっぽ

ろテレビ塔と一緒に行って観光を楽しむこともできました。外はあいにくの暴風雨でしたが、一緒に雨の中を走ったことも最高に楽しい思い出になっています！

帯広行き電車で乗るため札幌駅で別れたのですが、お互いに泣きそうになってしまい、それをごまかすようにそっけなく別れてしまったように思います。実はその友人と会う前は「北海道は遠いし、もしかしたら会うのは人生で最後になるかもな〜…」なんて思っていたのですが、涙を浮かべた友人の顔を見て、「また絶対に会いに来る！」と心の中で誓いました。

どんな旅行も不思議とドラマチックになるものですよね。今年も旅行で彩られた一年になりますように！

観光の未来はどうなっているのだろうか？

チスティリーナ・イリーナ (JIC モスクワ)

新年を迎える年末年始は、一年を振り返り、新しい年に何をしたいかを考える大切な時間です。

私たちの働く観光業界は、常に変化の最前線にあります。そんな中で、「10年後、世界の観光はどうなっているのだろうか？」と考えることがあります。10年というと、とても長い時間のように感じます。大きなプロジェクトを達成したり、大きな変化を起こしたりするには十分な時間です。しかし、10年前を思い出すと、あっという間だったと感じませんか？2036年までのこの10年も、すぐに過ぎてしまうかもしれません。

特に興味深いのは、旅行業界がどう変わるかということです。観光は、いつも新しい技術や社会の変化を映してきました。今後もテクノロジーが私たちの強力な味方になることは間違いないでしょう。例えば、AI (人工知能) が予約プロセスや現地での体験を大きく変えるかもしれません。バーチャルリアリティ (VR) は、行く場所を事前に詳しく見られるようになるでしょう。また、新しいトレンドとして「slow tourism」(ゆっくり旅をする) が、これからの大きな流行になるかもしれません。

未来の観光について考えていると、有名なソ連時代の映画を思い出しました。それは、キール・ブリーチェフの小説を原作とした1985年の映画「未来からの訪問者 (《Гостья из будущего》)」です。この映画では、主人公の少年コーリャ・ゲラシモフが未来にタイムスリップして、2084年のモスクワに行きます。そこにはコーリャがケンタウルス座からの観光客と出会います。バスはテレポート装置のような役割を果たして、子どもたちは空飛ぶ車「フリップ」に乗っています。2084年はまだ遠い未来ですが、この映画にあったようなテ



クノロジーが、私たちにとっての2036年までには、どこまで現実になっているのでしょうか。

サイエンス・フィクションだと思われていた技術が、今は現実になりつつあります。超音速旅客機、静かな高速鉄道、ロボットやドローンによる配送サービス…。これらの「不思議」としか思えなかったことが、10年後には私たちの日常の一部になっているかもしれません。

しかし、私の一番の考えは、観光にとって一番大切なのは「人間の好奇心」だということです。「もっと知りたい」「色々な場所へ行ってみたい」「違う文化の人と話してみたい」という、知りたい気持ちが観光を動かす力になります。テクノロジーはその気持ちを実現するのを助けるものであって、旅行をもっと安全に誰でも行きやすくするものです。

今日という日は、私たちの2036年に向かう小さな一歩です。新年に計画を立てながらも、楽しい驚きのためにスペースを残しておきましょう。

皆様、心から新年おめでとうございます！新しい年が、皆様にとって、新しいアイデアへの情熱や、輝かしい体験への喜びで目が輝く一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます！

2026年もよろしくお願いたします。



「10 年後の日本とわが社」

キリチェンコ オリガ (JIC 東京)

みなさん、明けましておめでとうございます。

2025 年はいかがお過ごしでしたか？ 私の 2025 年は、ありがたいことに忙しくさせていただき、年が明けたかと思えば、あつという間に今このコメントを書いているという本当に充実した一年でした。毎年、何を書こうか迷いますが、今年是我的のちょっとした気づきからの日本の 10 年後と、わが社の在り方について少し書こうかなと思います。

日本の 10 年後の姿として 1 番に考えられるのは、デジタル化や AI のさらなる発展です。

私は今年、ロシアへ帰省する機会がありましたが、ロシアの多くの決済方法はすでに現金ではなく電子マネーに切り替わっていました。公共交通機関も専用のカードや現金ではなく、電子決済やクレジットなどで支払うことが当たり前になっていました。また、今はロシアへの直行便は飛んでいないので、北京を経由して行きましたが、北京では多くの自動車が電気自動車に切り替わっていました。日本もきっと同じような方向に進んでいくのかなと思います。

これらの技術の発展というのは、一方では便利に思えますが、観光客にとっては障壁となることもあるかと思えます。例えば、国内での専用アプリやその他の電子決済というのは、その国に住んでおらず、それらのアプリを持っていない、モバイルデータも自由に使えない観光客にとってはあまり意味をなさないものとなってしまい、現金の対応がない場所では行動が制限されてしまいます。今後 10 年でこのような発展を遂げていくであろう日本社会に対応して、旅行会社であるわが社もサービスのアップデートをしていかなければならないと思います。具体的にどのような内容を実施していくべきか。例えば、レンタル Wi-Fi サービスの紹介やモバイル決済アプリの提供などは、これからとても必要になると思います。

10 年後という随分先のように感じますが、時間が過ぎていくスピードが速い現代では、「10 年プロジェクト」などと

いった名目は皆さんもよく目にするのではないのでしょうか。それくらい現代では、先を見越した計画が重要だということの表れなのだと思います。わが社もそうですが、皆さん自身も先を見越して、10 年後の未来へ備えつつ、楽しみにしながら過ごして行きましょう。

韓国語を勉強中です

レシュク リュボフィ (JIC 東京)

みなさん、こんにちは！ 昨年もあつという間に過ぎました。2025 年は個人的に大きい出来事が特にありませんでした。暇な時、映画を見たり韓国語を勉強したりしていました。2024 年から独学で学んでいるため、進み方はゆっくりです。一部の文法や一部の名詞が日本語と似ているから飽きずに継続しています。名詞の場合、漢字の訓読みと関係があります。普通に韓国語の流れを聞いたらどこが似ているか一切わかりません。が、言葉を区別して意味を調べたら、「なるほど！」と理解できるようになります。例を以下にあげます。

日本語	韓国語	名	-	myon
山	- san	もちろん	-	mullon
家族	- kajok	俳優	-	peu
継続	- kesok	配達	-	peedal
階段	- kedan	住所	-	juso
極東	- kuktton	書類	-	soryu
料理	- yori	新聞	-	shinmun
前夜	- jon`ya	時間	-	shigan

等々です (笑)。

昨年、ソウルへ 2 回旅行しました。一回目は冬の時、1 泊のみ。二回目は夏の時、4 泊でした。



ソウル南山公園からの景色

旅行には欠かせないものは、現地の食べ物ですね。韓国の伝統的なスープ料理であるトガニタンを試したくてソウル麻浦区にある「麻浦ヤンジソルロンタン」レストランに行ってみました。見た目は食堂のようですが、ミシュラン掲載のレストランらしいです。トガニタンが気に入って二日目もトガ

ニタンをいただくため、同じレストランに行きました。トガニタンとは「牛の膝蓋骨とその周辺の軟骨、肉などを長時間煮込んだもの」で、コラーゲンが豊富で美肌や滋養強壮に良いとされる健康食・保養食です。プルプルとした食感と白濁した優しい味わいのスープが特徴で、塩胡椒でシンプルに味付けし、食べる際に酢醤油につけて食べる人が多いです。一言で表すと、癒される味です。

その上、ソウルではカフェが多くて、混んでいないから、コーヒーを飲みながらゆっくりできます。

来年、機会がありましたら、韓国旅行にまた行きたいと思います。

「7年ぶりの海外へ」

佐藤 早苗 (JIC 東京)



今年完成予定？のサグラダ・ファミリア

あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

昨年は幸運にも2度海外旅行に行く機会に恵まれました。パスポートを更新し、いつぶりの海外だろうと古いパスポートを開いたところ約7年ぶりでした。

6月にマレーシアのクアラルンプールに行ってきました。

クアラルンプールはまさに眠らない町。深夜まで大勢の人々が行き交い、そのエネルギーに圧倒されました。様々な国籍の人がいるので、日本人が目立つこともなく、とても居心地よく過ごせました。ペトロナスツインタワー、バトゥ洞窟、カンチンの滝、セラヤン温泉と有名どころを回りました。セラヤン温泉は足湯のような小さな石のお風呂がいくつかあるのですが、どれも熱い！ちょうどいい温度のところを見つけ、足湯でまったりしました。ここは地元の人達の憩いの場となっているようでした。

そして先月はスペインのバルセロナとポルトガルのリスボンに弾丸で行ってきました。

バルセロナはちょうど10年ぶり。今年完成予定と言われている、サグラダ・ファミリアは果たしてどのくらい出来上がっているのでしょうか。10年前の写真と比べると、前はなかった中央の塔が出来上がっていました。目に見える進捗はこの中央塔だけなのか？工事はかなりののんびりペースで進んでいると思われまます。グエル公園、カサ・ミラは10年前は無料ゾーンや外観のみでしたが、今回はどちらも入場券を購入しガウディの世界に浸ることができました。

リスボンでは初めてファド（ポルトガル民族歌謡）鑑賞を体験しました。哀愁漂うファドを聴きながら頂くグリーンワインとバカリヤウ（鱈のコロッケ）。まさに至福の時でした。

欲を言うなら、ユーロがもう少し安くなるともっと有難いのですが・・・笑

「10年後、10年後・・・」

中林 英子 (JIC 大阪)

小学校の自由研究で、世界の都市のいくつかを調べたことがありました。当時、ソ連の資料を見ているとき、スターリン建築の立派なモスクワ大学の校舎を見つけました。「ここ行きたいな〜」でも、当時はソ連、簡単に行ける場所ではないということは、小学生でもわかっていました。遠く届かない「夢」だと思っていました。それが数年後、ソ連崩壊、冷戦終結を迎えました。そして、約10年後、私はモスクワ大学の学生になっていました。大きく世界が変わった90年代、私の人生を変えた時代だったかなと思います。

さて、この先私たちを取り巻く世界はどのように変わのでしょうか。人生を変えるような10年になるのでしょうか？

10年前、ロシア旅行のハードルがこんなに高くなるなんて想像しませんでした。旅行先としてメジャーになりつつあり、もうすぐ海外旅行の人気都市の上位にランクインしそうな時だったからです。美しい建築が立ち並ぶ街の散策、観劇、コンサート、美術館巡りなど魅力はたくさんあります。ロシア文学や芸術を知っていると、街が語りかけてくるようです。でも、予備知識がなくても豪華さや雄大さに圧倒されます。

私のモスクワの友人が時々「モスクワはこんなに美しいのよ、遊びにいらっしやい。」と写真を送ってくれます。美しい世界を今、見ないなんてもったいないと。街のイルミネーション、ドレスアップしてコンサートやレストランに行った写真など。そう、これが今、冬のモスクワの楽しみ方でもありますよね。最近、ロシアではアイアスショーが、頻りに開催されていて、「くるみ割り人形」や「シンデレラ」など、バレエの世界が氷上で演出されています。広告からもキラキラした雰囲気が伝わってきました。こんなのをやっているって想像しただけでワクワクしてきて、やっぱりロシアのフィギュアスケートが好きだなんて思いました。

10年後、いえ、もっと早く「最も近いヨーロッパ! 気軽にロシア旅行」ができるようになっていでしょう。でも旅は「生」の舞台と同じ、その瞬間しか出会えないものがあります。数年先なんて待っていただけませんか。



写真はロシアと関係なく、パルテノン神殿を背景に

「笑顔について」

井上 沙弥香 (JIC 東京)

モスクワで暮らしはじめた頃、私はよく笑っていた。

理由があったわけではない。日本で生きてきた癖のようなもので、初対面では笑う、困ったら笑う、沈黙が気まずければ笑う。笑顔は感情というより、体に染みついた動作だった。

スーパーのレジでも、学校でも、観光地でも、私はよく口角を上げていた。ロシア語がうまく出ないときほど、笑顔に頼った。言葉が足りないぶん、表情で埋め合わせようとしていたのだと思う。笑っていれば、まあ何とかなる。当時は、それを疑う発想すらなかった。

ある日、知人に言われた。「どうして、そんなに笑っているの?」

非難でも皮肉でもなかった。ただ、本当に不思議そうな顔だった。その瞬間、私は答えに詰まった。なぜ笑っているの



か考えたことがなかった。私にとって笑顔は選択ではなく反射だったからだ。

ロシアでは笑顔はとても正直だと思う。嬉しいときに笑い、楽しいときに笑う。それ以外の顔は基本的にニュートラルで、そこには「とりあえず笑っておく」という発想はあまりないようだった。はじめてロシアを訪れる日本人はまず彼らのその冷たい表情に戸惑うだろう。日本では、店員は笑顔で迎え、笑顔で送り出す。笑顔は礼儀であり、潤滑油であり、時には鎧でもある。

それがロシアでは、必要な言葉だけが置かれ、感情は添えられない。最初は、その無表情が少し怖かった。会話が淡々と進み、相手の反応が読めない。嫌われているのではと不安になることもあった。けれど、しばらくすると気づいた。彼らは冷たいのではなく正直なのだ。助けるときは助ける。必要なことは言う。それ以上は踏み込まない。笑顔が少ない代わりに、態度がぶれない。

私も少しずつ笑わなくなった。正確に言えば、「意味のない笑顔」をつくらなくなった。わからないときはわからないと言う。困っているときは困っている顔のままである。笑ってごまかさない代わりに言葉を使うようになった。それは、少し怖くて少し楽だった。

数カ月の滞在を終え、日本に戻った。すると、驚くほど自然に私はまた笑い始めた。電車の中で、店で、学校で。理由はない。ただそこが「笑顔をつくる場所」だったからだ。

人は、生きる環境によってこんなにも簡単に振る舞いを変える。意志や性格よりも場所の力のほうがずっと強いのかも、しれない。そう思うと少しおかしくなる。

あれから何年も経った今でもときどきあの問いを思い出す。今の私は笑顔をつくる自分もつくらなかった自分もどちらも否定する気はない。ただ、あの街で投げかけられた問いだけは今も心のどこかに残っている。

私は何のために笑っているのだろうか。

だいたいのことには真にやむを得ない事情がある

岡本 健裕 (JIC 大阪)

■ 1

みなさん、昨年公開されて大ヒットしているアニメ映画『チェンソーマン レゼ篇』は観ましたか。私は観ました。そして予想外のところでぶったまげました。唐突にソ連映画が出てくるんですよ。それは主人公の青年デンジとその上司の女性マキマが、あちこちの映画館をはしごして回るという、ちょっと変わったデートをするシーンです。映画漬けの一日を過ごした二人が最後に選んだ作品が、タイトルは見えませんが、どうみてもソ連映画の『誓いの休暇』(の忠実なアニメ化!) だったんです。

本物の『誓いの休暇』はド直球の感動モノなんですが、チェンソーマンの世界では「難しくてよくわからないと評判の映画」という設定になっています。でも、それまで何を観ても全然心に響かなかったデンジとマキマは、ここで初めて涙を流すんですね。ああ、いい演出だな、もうこのシーンだけでチケット代の元取れたな、とか思ってたなら何と、直後にマキマも全く同じことを言うんですよ。やられた、完全に掌の上じゃないか。(チェンソーマンの原作漫画を読んだ方はもちろんこのセリフをご存じですが、私は未読で知らなかったのです。)

スクリーンの向こうのスクリーンでかかっている映画を登場人物たちと一緒に観る、という入れ子構造だけでもう、十分、原作漫画を凌駕する 3 次元体験になっているのに、その入れ子の階層を越えてセリフまでシンクロしてしまったんだから、ちょっと出来過ぎですよ。

驚いたことはこれだけではありません。登場人物が突然ロシア語で歌い始めるのです。それは作品のタイトルにもなっているレゼという女性なんですが、彼女は何の前触れもなくロシア語で歌うので、これにも意表を突かれました。レゼを演じたのは上田麗奈さんという声優ですが、きっとものすごく練習されたんだろうと思います。本当にうまかったですよ。

この作品に限らず、日本のアニメ作品にロシア語のセリフが出てくることはたまにあります。でも、その全ての出来がいいわけではありません。私は声優の仕事を中心に尊敬していますが、(だからこそ) 演技のプロにこんな仕事をさせてはいけなと、いたたまれなくなるようなロシア語に出会うこともあったりなったりします。

チェンソーマンの映画に出てきたロシア語の歌は作品オリジナルのようです。説明は一切ありません。ロシア語がわからない人は置いてけぼりだし、ロシア語がわかったところで、



謎だらけの歌詞なんです。だからこれは誰に聴かせるわけでもなく、ただレゼが歌いたいから口ずさんでいるんですよ。観客など知ったことかと。

作るのにめちゃく

ちや手間がかかるアニメーションでそんな表現をされてしまうと、あ、このキャラは手加減してくれないんだな、とわかります。もう止められない強さと疾走感がスクリーンからどンドン溢れてくるんです。そりゃヒットするわけですよ。

■ 2

さて、私は JIC に在籍しながら、ティグレという組織内の税理士法人へ出向してそろそろ 4 年が経ちます。ティグレはグループ内に政治団体を持っており、毎年、「国への要望書」をまとめて関係諸機関へ要請活動を行っています。

せっかくなので、去年私は以下のような内容を要望書に載せることを提案しました。

「政府には『ロシアは日本の安全保障上、決して研究を怠ってはならない地域であるから、たとえ外務省の危険情報がいかなるものであっても、志ある者のロシア留学については、政府としてこれを妨げない』というメッセージを発していただきたい」

果たしてどうなったか。2025 年 9 月 12 日、外務省の危険情報が更新され、ロシアへの渡航について、「ただし、真にやむを得ない事情がある場合には渡航・滞在することは妨げません」という文言が現れたのです。これってほぼほぼ丸呑みしてもらえたようなものではないですか! やってみるもんだ。

ところが、あとでティグレの「国への要望書」を見せてもらうと、私の提案は載っていませんでした。不採用だったんですね。つまり、政府の中にも、私と志を同じくする方がいて、そうなったということなのでしょう。よかったです。要望などしなくとも、望ましい方向へ世の中が動くならば、それが一番いいからです。

■ 3

世の中のだいたいのことは先回りされていて、私は誰かの掌の上ってことです。夢に描いたことのいくつかは 10 年で実現できたつもりですが、どれも錯覚かもしれません。私の中学生の娘が言うことには、仲のよい友人がいま、ソ連・東欧史に強い関心を持っているのだそうです。この友人は私の大切な娘に『まどマギ』や『シャミ子』を教えるという英才教育を施してくれた恩人なのですが、このまま行くとさらにまずいことになるかもしれません(いいぞもっとやれ)。ちなみに娘はチェンソーマンを原作漫画から映画までフル履修済みです。このまま世界の果てを目指すがいい。父は止めん。

「10 年後の夢」

神保 泰興 (JIC 東京)

明けましておめでとうございます。

私たちを取り巻く国際的な環境は、引き続き厳しい状況の中ですが、皆様の支えもあり、ロシア以外の各国などを含め、お客様の渡航のお手伝いをする機会も徐々に増えてきました。6 月には、昨年に引き続き、海外添乗 (バルト 3 国) に行かせていただき、グループのお客様と共に、一度は行って見たかったリトアニア・シャウレイ郊外の「十字架の丘」を初訪問することもできました。

11 月初旬には、中央アジアのキルギスに行って参りました。キルギスは、学生時代から数えて 4 度目、実に 17 年ぶりの訪問になります。この国は、いわゆる「映える」名所・旧跡などは、隣国のウズベキスタンなどに比べ、決して多くありません。しかし、中央アジアの真ん中、天山山脈と支脈のアラ・トゥの山々に囲まれた美しい豊かな自然、そして何より、私が思う最大の魅力は、日本人に似た風貌の、素朴でお客様好きな、キルギスの人々が温かく迎えてくれることです。

キルギス人の多くはイスラム教徒ですが、世俗化が進み、戒律の厳しさを感じることはほとんどありません。首都のビシュケクはロシア人が建設したソ連風の都市で、街ではロシア語が普通に聞かれ、キルギス語よりもロシア語の看板が多く目立つくらいです。今回、4 度目でやっと、キルギスを代



表する景勝地、標高 1600 メートルの高地にある琵琶湖の 6 倍もある古代湖「イシク・クル」にも足を運ぶことができました。

私自身、過去 3 回現地を訪れた経

験から、多くの方々に、キルギスの良さを力説して回ってきました。実際に、複数のお客様がキルギスを訪れて下さり、満足したとのお声をいただくことができます。

まだまだ若輩者のつもりでいましたが、世間一般の常識からすると、第 1 線で仕事を続けられるのも、あと 10 年余りになります。今の厳しい状況が、早く改善していくことを期待するばかりですが、キルギスのような、まだまだ知られていない、現地の魅力を紹介し、そこで暮らす多くの人たちとの交流、相互理解のお手伝いを少しでも多く進め、少し大風呂敷ですが、世界の平和と繁栄に貢献できたと、自身に誇れることのできる 10 年後でありたい、と夢見ています。

今年もどうぞよろしくお願ひ致します。

《協力のお願い》

モンゴルの超温かいヤクの靴下をはいて、モンゴルの貧困学生の就学援助にご協力ください！

JIC ではモンゴル・ゾルグ財団の呼びかけに応じて、ヤク・ウール 100% の靴下 (男性用/女性用) を販売しています。
1 足 2000 円 (送料別/3 足以上お買上げで送料無料)
申込み・問合せは ☎ TEL: 03-3355-7295
是非、ご協力ください。

MONGOL Yak Socks

For men

Mongolia

Hanti-ahazet
National flag icon

モンゴル、ゾルグ財団の就学援助基金に協力下さい。

サンジャースレンギーン・オユーン会長

ソリグ財団
公式WEBサイト

呼びかけ協力団体

ティグレ連合会
ティグレフォーラム
国際親善交流センター(JIC)

大阪市中央区谷町2-2-22 NSビル9F
06-6966-2596

モンゴルには、学びたくても経済的な理由で学ぶことができない学生が数多くいます。ゾルグ財団では、そのような学生を支援するための奨学基金を設立し、寄付を募っています。この靴下の販売による収益の一部は、この奨学基金への寄付金として活用されます。

皆さまの温かいご支援を心よりお願い申し上げます。

素材 ヤクウール100%

サイズ 25cm - 27cm

製造国 モンゴル

ヤク靴下の洗濯方法

中性洗剤を使用し、優しく押し洗い (手洗い) の後、形を整えて、陰干ししてください。

第 2 回 「徳山あすかのロシア生活」

2 週間連続！

Санктペテルブルク弾丸旅行

年末、モスクワから Санктペテルブルクに 2 週間連続で週末旅行に行ってきました。1 回目はウズベキスタン関連のイベントに参加するため、2 回目はマリインスキー劇場でバレエ「くるみ割り人形」を観るためでした。寝台列車の旅が大好きなので、2 回とも、モスクワ発着の夜行列車を利用しました。昔はロシア鉄道と言えば、目的地の都市の名前がついた駅から出発するのが普通でした。例えばクルスクに行くならモスクワのクルスク駅から、 Санктペテルブルクに行くならレニングラード駅から列車が出ていたものですが、最近は何の関係の駅から出ることの方が多いです。ヴォストーチヌイ駅という新しい駅もでき、そこからはロシア中の全方面に長距離列車が出ています。

私が特によく乗っているのは、モスクワのキエフ駅を午前 1 時に出発する Санктペテルブルク行きの列車です。これだと仕事が終わってからでも余裕を持って乗れますし、出発時刻が遅く、使っている車両も古いので、だいたい空いています。お値段も最安値で、およそ片道 5000 円です。

ウズベキスタン・スルハンダリヤ州との知られざるつながり

ウズベキスタンの友人から、 Санктペテルブルクの孤児院や老人ホームで慰問事業をするので、来ないかとお誘いがありました。だいたいウズベク人は直前に誘ってくるので、考える間もなく「行く」と即答しました。ちょうど日本で、中央アジア 5 か国の首脳と日本の総理大臣が一堂に会する「中央アジア+日本」が開催される直前のタイミングでした。そのこともあって、慰問事業を取材すれば、日本人にウズベキスタンについて知ってもらうのにちょうどよい機会だなという目論見もありました。

この慰問事業は「 Санктペテルブルクにおけるスルハンダリヤ州の日」というイベントの枠内で行われました。私の友人は、ウズベキスタンの中で最南端に位置するスルハンダリヤ州の民間企業で働いています。その会社と、スルハンダリヤ州政府が合同で事業を実施。 Санктペテルブルクの孤児院の子どもたち 900 人に、新年を控えてのプレゼントが贈られました。その翌日には老人ホームで、スルハンダリヤ産の家具を贈呈し、伝統音楽や歌、ダンスが披露されました。

この老人ホームは普通の老人ホームではありません。「ベ



Санктペテルブルクの夜景

テラン・労働の家」という名前前で、その名の通り、第二次世界大戦・大祖国戦争時に、従軍経験にかかわらず、様々な形で国のために働いていた人がたくさん入居しています。そしてその方達は、ほぼ漏れなくレニングラード包囲戦を生き延びています。レニングラード包囲戦と言えば、1941 年 9 月 8 日から 1944 年 1 月 27 日まで続きました。町をナチスドイツ軍に囲まれ、300 万人の市民のうち 3 分の 1 が飢餓で命を落としたとも言われています。

当時、レニングラードの子どもたちはウズベキスタンに集団疎開しました。スルハンダリヤ州では、そのうち 5000 人ほどを受け入れました。スルハンダリヤは年中太陽が輝き、とても暖かく、レニングラードとは真逆の気候です。そのような場所で青春時代を送った子どもたちの中には、両親を失って帰る場所がなくなってしまった人もいます。その子どもたちはそのままスルハンダリヤに残りました。現地で仕事を見つけた人もいれば、結婚した人もいます。ウズベキスタンの他の都市でも、もちろん避難者を受け入れました。首都タシケントには、レニングラードの子ども達を記憶にとどめるための記念碑が昨年オープンしました。

ホームの入居者は圧倒的に女性が多かったです。私は手持ちのウズベキスタンの民族衣装を着て行ったので、ウズベク人に間違われました。ハグされながら「サマルカンドは素晴らしいところだわ」とか「あなたの国は素晴らしい」などと褒めてくれるので、最初は日本人だと言いつつに申し訳ない気持ちになりました。高齢のロシア女性たちにとって、ウズベキスタンの文化は、ノスタルジーを感じさせるものようです。皆、口々に、いつどこで誰と、ウズベキスタンのどの町を訪問したかという話で盛り上がっていました。

タシケントから来た女性歌手のマルジョナさんは、素晴らしいロシア語で、昔のヒット曲や、 Санктペテルブルクをモチーフにした歌を次々披露し、拍手喝采でした。タシケントでは公立学校においてロシア語で教育を受ける人が多く、マルジョナさんもそうだったそうです。ただし最近では、英



マルジョナさんや入居者、職員の方々と

語が選択できる場合は英語を選ぶ人が多数派です。いっぽう、スルハンダリヤのような地方では外国語で学べる学校がそもそも無いことが多いです。

慰問事業の締めくくりは、カザンと呼ばれる大鍋で作った熱々のプロフ（チャーハンのようなウズベキスタンの郷土料理）です。カザンは建物内に持ち込めないため、マイナス 10 度の中庭で調理を行い、真っ白の湯気の中から羊肉の塊が姿を現しました。肉や野菜、米、飾り付けのうずらの玉に至るまで、必要な材料は全てウズベキスタンから運んできたという気合いの入りようです。

元旦に 100 歳の誕生日を迎えた
エメリヤノワさん

私とマルジョナさんは、食堂で、アンナ・エメリヤノワさんという入居者の女性と同席させてもらい、一緒にプロフを食べました。エメリヤノワさんは、なんと 1 月 1 日に 100 歳になるというのです。ロシアでは事前のお祝いは不吉と考える人が多いため、後日、新年になってからお祝いのメッセージを送りました。エメリヤノワさんは耳が遠いですが、自分でしっかりと歩けますし、新聞を読み、ロシアや世界のニュースもチェックしています。引退する前は教職に身を捧げたということで、非常に知的な女性です。

知事不在のレセプション

慰問事業の翌日、川沿いの素敵なイベント会場で、スルハンダリヤ州のレセプションがありました。要するに、サンクトペテルブルクとスルハンダリヤの関係を強化するため、偉い人たちが集まるパーティーです。友人のコネで私も招待状をもらったため、非日常を体験してきました。招待状には「18 時開始」と書いてありました。大雪で、少し遅れて到着したため、急いでコートを預けようと思ったら、なぜか他の人の上着がほとんどかかっていません。中に入ると準備のスタッ

フと、数人の日本人がいるのみ、という謎の状況でした。今のロシアにおける日本人社会はかなり狭くなっているため、ほとんどの人が知人でした。

そこで判明したのが、実はもともと 18 時開始予定でしたが、19 時 30 分に変更になったとのこと。しかし私の分も含め、日本人の招待状は誤って訂正前の時刻を記載して発送してしまったというのです。きっちりした日本人ですから、皆さん少し前に到着しており、結局 2 時間近くも待つことになりました。もう皆さん慣れているのか、「ウズベクだからね」とにんまり。その分、思いがけず日本人同士でおしゃべりする時間ができました。



来場者にふるまわれたドライフルーツ

ようやく宴が始まりました。テーブルの上にはぎっしりと馳走が並んでいます。冬のロシアでは新鮮なフルーツはとても高価なので、苺がキラキラ輝いて見えます。スルハンダリヤ州のレセプションですから当然主催者は州知事です。私は以前、何度か州知事に取材したことがあったため、会えるのを楽しみにしていました。知事は前日の夜に、ロシア入りしているはずでした。しかし乾杯の挨拶をしたのはテルメズ大学の学長で、知事の代わりに挨拶文を読んでいるではありませんか。関係者にこっそり聞いてみると、なんと知事は確かにサンクトペテルブルクに到着したのですが、そのタイミングでミルジヨエフ大統領に呼び出され、飛行機から出ることなく、そのままウズベキスタンへ戻っていったというのです。自分が主役のイベントにも出られなくなるとは驚きです。開始時刻の間違いいには笑っていた日本人のメンバーも、こればかりは「さすが色々な意味でウズベクだ」と逆に感心していました。

神戸ラーメン…と思ったら高知！？

ちなみに 1 日目の夜、私はラーメン屋を開拓しに行っていました。私の出身地は神戸市なのですが、地図を見たら神戸ラーメンというお店がオープンしているではありませんか。これはなんとしても試さねばと閉店間際にギリギリで駆け込みました。席についてワクワクしていると、そこには高知大学の大学案内 2025 年度版がありました。そしてトイレに目をやると、暖簾には坂本龍馬が描かれています。これはまさ

か、神戸と高知を間違えたのかも？との疑念が私の胸をよぎりました。漫画「ドラゴンボール」をモチーフにしたと見られるイラストがたくさん飾ってありましたが、店名以外、神戸らしいところは全くありません。運ばれてきたラーメンは、麺はいまいちでしたが、スープもトッピングも美味しく、満足しました。次の機会に、店名の謎を解き明かしたいと思います。



ペテルブルグの「神戸ラーメン」

遠征する価値あり！マリインスキー劇場

バレエが大好きな私の最近の悩みはチケット代が高すぎることです。モスクワのポリショイ劇場でくみ割り人形を見たいと思っても、12月中旬の段階で残っているチケットは、公式サイトで4万5千ルーブル、およそ9万円というとんでもない価格です。ちなみに、もっと早く買ったからといって安いわけではありません。高くても見やすい席と、お手頃価格だけれど見にくい席が先に売れ、中途半端な席が残るのです。サンクトペテルブルグのマリインスキー劇場は、バレエのレベルは同じかそれ以上でありながら、半額以下です。交通費を入れても、結果的に安くつきます。

私はキャストが出揃ってからチケットを買いたいタイプで、「推し」であるファースト・ソリストの永久メイさんが主役を務める日に日帰りで行くことにしました。いつもは1階席を買いますが、年末年始のくみ割り人形のシーズンは予算的に厳しいので、最上階の中央に近い席を取りました。最上階は、中央から離れれば離れるほど、舞台の見切れがかなり大きくなるので、注意しなければなりません。



最上階の座席から見た舞台

私の隣の席には白髪のご婦人が10歳くらいの男の子と一緒にやってきました。おばあちゃんとバレエ鑑賞なんて素敵だなあと微笑ましく思っていると、男の子はおとなしく観ているのに、おばあちゃんの方が、開演後もずっとスマホをいじっています。メッセージャーでメッセージを送ろうとするものの、老眼で文字が見にくいようで、暗闇の中でレンズを近づけたり離したりしています。最初は私も我慢していましたが、舞台に主役が出てきてそれを続けていたので、さすがに声をかけることにしました。

最初は丁寧に、やめてもらえるよう「お願い」しました。するとおばあちゃんは「気にするな！私じゃなくて舞台を見ろ」と反論してきました。こういうタイプにはビシッと行ってあげないといけないので、同じくらいのトーンで「注意」したところ、ようやくスマホをしまいました。

ロシア語というのは本当に表現の幅が大きく、今までの経験上、相手と同じくらいのレベルの丁寧さ、あるいは乱暴さで会話をすると、こちらの希望が聞き入れられることが多いです。ちょっと話がそれますが、ロシア人に要望を述べているのに無視されるという場合は、舐められているということなので、ちょっと強い表現を使うくらいでちょうどいいかもしれません。

今までマリインスキー劇場でこんなことはなかったのでもっと残念に思いましたが、せっかくのバレエ鑑賞ですから、気持ちの切り替えが大切です。幕間には劇場のショップに寄りました。ここの接客はいつも気持ちがよく、お目当ての2026年のカレンダーも買えたので、満足しました。バレエはもちろん素晴らしかったです。



サンクトペテルブルクの夜景

サンクトペテルブルクはロシア生活の一年目に住んでいたこともあり、私にとってモスクワの次に馴染みがある町です。ただし、当時の辛い思い出が蘇るので、数日単位で遊びに行く位にとどめておくと、純粹に町の良いところのみを楽しめる気がします

(とくやま・あすか/モスクワ在住ジャーナリスト)

≪ 投稿 ≫

ウズベキスタン一人旅で感じたこと

井上 智隆(静岡県在住/旅行好きの会社員)

2024/9/21~27 にかけて、ウズベキスタン(タシケント、サマルカンド、ブハラ)を一人旅しました。日本で事前に予約したのは飛行機、ホテル、高速鉄道、一部送迎で後は自由気ままに散策しました。連日快晴で、気温も高すぎず、旅行するには良い時期だったと思います。

2018 年にロシア(モスクワ、サンクトペテルブルク)を旅行しており、旧ソ連地域は 2 回目です。その他、ドイツなどヨーロッパ諸国も 2014~2019 年に旅行したことがあるため、ロシアやヨーロッパ諸国との比較を交えながら記載します。

【ウズベキスタンの感想】

ウズベキスタンは「旧ソ連構成国」ではあるものの、ソ連時代の名残やロシアの影響を感じる場面は地下鉄の構造や使用する配車アプリなど僅かでした。ロシア モスクワではソ連時代の名残として、レーニン像や「鎌と金槌」のマークを街なかで見かけますが、ウズベキスタンでは見かけませんでした。また、サンクトペテルブルクで見かけたような帝政ロシア時代の様式のような建物もいくつか見かけはしたものの、説明が少なかったです。逆に、資料館などではタイムル朝やシルクロードを始めとする中央アジアで栄えていた時代の展示や説明が多く、この時代を大切にしている印象でした。旅行前、今なおソ連の名残があるという勝手なイメージを持っていましたが、ソ連との精神的な決別、「ウズベキスタン」としての独自の歴史・文化を大事にしている姿勢を感じました。

街の雰囲気

皆さんとてもフレンドリーで、今まで旅行した国の中で一番良かったと感じます。ヨーロッパ諸国では物乞いや不審者から声をかけられることが多く(ただし旅行者によりけりでこのような経験のない人もいます)、場所の確認などで立ち止まることもはばかれる状態でした。ウズベキスタンではそのようなことはなく、(子供も大人も)笑顔で挨拶までしてくれました。

中でも印象的なのは、ブハラの観光地から離れた所にあるプロフ屋さんでの出来事です。「SHOXPALOV」というお店で、Google マップの口コミで高評価だったので配車アプリを使って行きました。家族経営のお店でしたが、日本人が珍しかったようで、店員が色々話したそうでした。しかし、お互いの共通語がなく(相手は英語を話せない)、かろうじて聞き取れる地名やジェスチャー等でコミュニケーションを図りました。当時、翻訳アプリの使い方もよく分かっていなかったため、意思疎通は難しかったです。しかし、帰り際、店にいた経営者の子供も含めて、手を振ってお見送りをしてくれました。その際、先ほどの店員が何か言っていたのですが、ジェスチャーから想像するに、おそらく「また来てね」と言って

いたのではないかと思います。このようなことは初めてで、とても心温まる経験でした。

ロシアに行ったときにも感じたのですが、旧ソ連地域ではヨーロッパ諸国で受けたようないわゆる人種差別を受けませんでした。ソ連時代を含めて、昔から様々な民族が共生しているからでしょうか。

私の周りでも、「旧ソ連地域は怖い」というイメージを持たれている方は多いです。日本人だけでなく、東南アジアの方も同様のことを言います。しかし、実際はそんなことはなく、「百聞は一見に如かず」という言葉がピッタリだなと感じます。

【その他】

意外にも日本人観光客が多かったです。彼らの多くは団体ツアーかガイド付きでしたが、Google マップと配車アプリ(Yandex Go; 英語にも対応)を使えば、個人旅行でも問題なかったです。公共交通機関があまり整っていないため、基本的にタクシー移動ですが、料金も安く(近場だと 70 円、30 分走っても 500 円程度)、ドア to ドアになるため、他の国のように電車やバスを乗り継ぐ場合と比べて観光はしやすかったです。ただし、ウズベク語はラテン文字、ロシア語はキリル文字を使いますが、場所によっては配車アプリの表示やお店のメニューがキリル文字(ロシア語)表記しかないことがあり、個人旅行であれば、キリル文字が読める状態にしておいたほうが良いと思います。私はロシア旅行のためにキリル文字を独学したのですが、その経験が役立ちました。



サマルカンドの郷土史博物館

元は 19~20 世紀に建てられた旧 Russian-Chinese Bank だそうです。外観・内装共に銀行というより宮殿のようで、ロシアのエカテリーナ宮殿やエルミタージュ美術館を彷彿とさせます。中の展示は、シルクロード(織物)関連でした。

ブハラ市内にある城壁



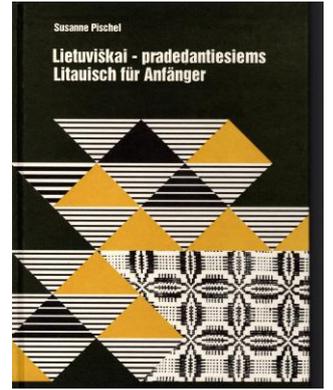
街を歩いていたときに見つけた城壁です。アルク城の西側にあり、Google マップでは「Wall of Bukhara」と書かれています。ブハラは全体的に、アニメのアルスラーン戦記を彷彿とさせる風景でした。訪問した 3 都市の中で、ブハラがお気に入りです。

こんな時代にロシア語のすすめ

第 14 回

「リトアニアで大事件」(前編)

黒田 龍之助

ドイツ語で書かれた音源
付きリトアニア語教材

学生時代のわたしはロシア語を学習しながらも、旧ソ連諸共和国に幅広く関心がありました。スラブ圏であるウクライナとベラルーシは当然としても、それ以外でもっとも惹かれたのがリトアニアでした。興味の中心はもちろん言語です。

リトアニア語は言語学的にインド・ヨーロッパ語族というグループに属します。ここには英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語など、主要なヨーロッパ諸言語はハンガリー語とフィンランド語を除けばたいていこれに含まれます。この語族はさらに語派に分かれ、英語やドイツ語はゲルマン語派、フランス語やスペイン語はイタリック語派です。その中でリトアニア語が属するバルト語派は、ロシア語が属するスラブ語派と関係が近いといわれています。大学院生になって、スラブ語派の諸言語に関する論文を読んでいると、リトアニア語が引用されることもしばしば。興味を持つのも当然なのです。

JIC などの仕事を通して、バルト諸国ではロシア語通訳の仕事をしていろいろしましたが、エストニアとラトビアは訪れたものの、リトアニアだけは何故か縁がありませんでした。エストニアもラトビアも面白いのですが、エストニア語はフィンランド語に近い別系統の言語ですし、ラトビア語はバルト語派に属するもののリトアニア語ほど古形を残していないので、歴史文法に興味のある大学院生には少々距離を感じます。

やっぱりリトアニアなんです。

現地へ行きたかったのですが、それよりも言語を学びたい気持ちのほうが強かったです。ところが当時はそれがタイヘンでした。まずリトアニア語を教えてくれる学校がない。それどころか教科書もない。いまリトアニア語を勉強したいと思ったら簡単で、櫻井映子『ニューエクスプレスプラス リトアニア語』(白水社)を買ってきて、それをせつせと覚えればいいでしょう。ところがわたしの学生・院生時代にはそのようなものがなく、それどころか外国語で書かれた教科書を手に入れることさえ、容易ではありませんでした。

それでも 1990 年代になると、ロシア語や英語で書かれたリトアニア語の教材が少しずつ出版されるようになり、それを元に勉強しました。誰も教えてくれませんから、もちろん独学です。大学の非常勤先に向かう電車の中をリトアニア語の勉強時間と決めて、混んでいるときは吊革にしがみつながら教科書を覗みます。我ながら涙ぐましい努力です。独学

はつらいよ。さらに外国語を勉強するときは、やっぱり音が聴きたい。ところが教科書は手に入っても、音源付きがなかなかありません。やっと見つけたのはドイツ語で書かれた教材の付属カセットテープ。リトアニア語の間にドイツ語も流れるので、そっちのほうが気になって仕方ありません。これじゃドイツ語のほうが上達しそう。

やっぱり現地で学ぼう。そろそろ機が熟したようです。

21 世紀になってから、夏休みを 1 か月使って第二の都市カウナスでリトアニア語の研修に参加しました。振り返ってみれば、これがわたしの最後の海外研修でした。そのときの話は『ポケットに外国語を』(ちくま文庫)に書きましたので、ここでは省略します。間抜けな失敗や勘違いをくり返ししながら、ドイツやポーランド出身の若い受講生と机を並べて必死に勉強しました。

どんな外国語でも、現地で学んでいるからといって、急に上達するわけではありません。そのうえリトアニア語は、ロシア語に輪をかけて文法が複雑な気がします。たとえば格変化では位格というのがあって、これはロシア語の前置格に近いのですが、ロシア語と違って前置詞なしで場所が示せるのです。Kaunas「カウナス」の位格形 Kaune は、これだけで「カウナスで」という意味です。ロシア語はもちろん、英語でも前置詞を使いますから、こういうのは慣れるまで、なかなか使いこなせません。

そういうわけで、別の外国語に頼らなければならない場面もありました。当時のリトアニアでは、若い世代は英語、年配の方々はロシア語で、両方がわかる人はめったにいませんでした。相手によって使い分けなければならないので、いろいろ気を遣います。

首都ビリニユスにある、芸術家チュルリヨーニスの博物館を訪れました。リトアニア人のガイドさんは、英語とロシア語の両方ができるそうです。さすが。そこでロシア語で案内をお願いしました。たいへん上手なロシア語だったのですが、ときどき кто「誰」と что「何」を逆に使っています。実はリトアニア語の疑問詞 kas は「誰」と「何」の両方を表すのです。その影響で間違えてしまうのでしょうか。ロシア語でも英語でも、日本語だって区別する概念が、リトアニア語では

1 つになっているとは面白い。

やはり外国語は、実際に勉強してみないと気づかないことがありますね。

研修に参加した翌年の夏、カミさんといっしょにヨーロッパを旅行した際、リトアニアにも寄りました。宿泊は首都ビリニュスでしたが、天気の良い日を選んで、2時間ほどバスに揺られてカウナスに行きました。自分の「留学先」をカミさんに案内して、リトアニア語ができることをちょっとだけ自慢したかったのです。難しい話はできないけれど、簡単な日常会話くらいだったら、前年の経験から上手にこなせる自信がありました。

ヨーロッパでは食事のとき、チップを渡す習慣があります。といっても特別に用意する必要はなく、請求書の額に少し加えて渡せばいいのです。たとえば合計 328 だったら、切りよく 350 を渡す。では手元に細かいのが 350 なくて、たとえば 500 札しかなかったらどうするか。そういうときは「350!」といって渡せばいい。相手はおつりを 150 渡してくれるはず。間違っても日本語の感覚で「500 お願いします」といってはいけません。おつりは一円も返ってきません。

これができると気持ちがよくて、チェコやポーランドでも成功体験があったので、カウナスのレストランでもやってみました。カミさんの前でカッコいいと見せたいですからね。ところがそのウェイターは、わたしのリトアニア語に対してげげんな顔をしてその場を立ち去り、しばらくしてからお釣りを律義に 172 持ってきました。つまりわたしが発音したリトアニア語の数詞が、理解できなかったわけです。カミさんはニヤニヤ笑っています。わたしはもらったお釣りのうち 22 をテーブルに残して、すげすごと店を後にしました。ああ、情けない。

外国語は急に身につけません。加えて復習もせずに 1 年も放っておけば、忘れてしまうのも当然。やはり日々コツコツと続けるしかありません。それでも多少は覚えているもので、たとえば帰りのバス車内に流れるラジオニュースでは、ニューヨークが盛んに話題になっていることが聴き取れました。でも詳しくはわかりません。なにか事件らしいのですが、わたしのリトアニア語ではこれ以上は無理でした。

ビリニュスに戻り、ホテルに帰るとフロントにあるテレビではアメリカ CNN のニュースが流れていました。字幕には Breaking News つまり臨時ニュースとあり、ニューヨークの高層ビルから煙が出ています。ビル火災でしょうか。事件には違いありませんが、それにしてもラジオニュースといい、このテレビ番組といい、外国の火事くらいですこし大袈裟ではないでしょうか。

それがわたしのトンデモナイ勘違いであることに気づくのは、数分後のことでした。

その日は 2001 年 9 月 11 日、アメリカ同時多発テロだったのです。(この項、続く)

<日ロ交流情報>

ロシア語映画発掘上映会

回を重ねて 20 回！ 継続は力なり



ロシア語映画発掘上映会（主催；Ace Square 守屋愛代表）は順調に回を重ねています。

第 18 回 11 月 2 日「針 REMIX」（ラシド・ヌグマノフ監督、ビクトル・ツォイ主演、2010 年）

第 19 回 12 月 28 日「1950 年代ソユズムリトフィルム制作アニメーション特集」

第 20 回 1 月 10 日「ЧП 非常事態」（ヴィクトル・イフチェンコ監督、1959 年）

と、最近ではほぼ 1 か月に 1 回のペースです。まさに「継続は力なり」。ロシア語映画発掘上映会は映画好きのロシア関係者の間ですっかり定着したようです。守屋愛さんに、この 3 年間の取組みを振り返り、当初予期しなかった新しい発展の芽が見えてきたこの発掘上映会の成果について、本号に寄稿していただきました（19 頁に掲載）。

横山周導師 1 周忌で偲ぶ会

語り伝えたい慰霊と平和の思い



シベリア抑留犠牲者の慰霊とシベリア出兵戦争のロシア人犠牲者の鎮魂、日ロ両国民の平和を願う旅を長年続けてこられた横山周導師（岐阜県揖斐川町・勝善寺住職）が 24 年 8 月に亡くなられて 1 周忌。10 月 25 日に、「慰霊と鎮魂の旅」を続けてきた有志の

皆さんが勝善寺に集まり、「偲ぶ会」が開かれました。

「シベリア抑留・シベリア出兵の悲劇を二度と繰り返すまい」と、アムール州・ハバロフスク州の人たちと交流を続け、慰霊と平和の取り組みを続けてきた横山さんの思いを引き継ぐために、自分たちはこれから何ができるだろうかと、一人一人が思いを巡らせる偲ぶ会となりました。

ロシア文化フェスティバル IN JAPAN 好評博した民族アンサンブル公演

ロシア文化フェスティバルで、「ルースカヤ・ヤルマルカ」のコンサートが、11月6日、東京・市ヶ谷のルーテルセンターで開催されました。バヤン、バラライカ演奏家のゲンナージイ・シシリンさんとその家族4人によるロシア民謡20曲余りの演奏に参加者は大満足でした。

11月26日、ドキュメンタリー映画「デルスウザーラ・黒澤明のロシアの夢」の上映と監督講演会が、浜離宮朝日ホールでありました。

12月1日には「ロシアの音楽大学・劇場アカデミー卒業生による名曲コンサート」が、東京港区の在日ロシア大使館ホールで開催され、ピアノ、ヴァイオリン、アコーディオン、声楽などのアーティスト16名が競演しました。



(写真)12月1日、在日ロシア大使館にて

ロシア文化フェスティバルは2026年に開始20周年を迎えます。これを記念して、10月末にロシア最高の舞台芸術と言われる「モイセーエフバレエ団」の来日公演が予定されています。

ロシアの素顔を知ろう会・奈良 ロシア在住写真家・田中さんの講演会

「日本の報道ではロシアの本当の姿がよくわからない。ロシアに住んでる日本人に話を聞こう」と、ロシア在住写真家で、現地から Facebook の発信を活発に行っている田中よしひろさんが一時帰国するのを機に、その講演会が12月6日、奈良県桜井市で開かれました。準備したのは Facebook つなりのロシア好きの主婦たち。初めての取り組みにもかかわらず20名の参加者が集まり、田中さんのちょっと難しい話に耳を傾けました。



藤本和貴夫先生を偲ぶ会 「まるで同窓会」90名が参会

11月15日、大阪・豊中市の大阪大学会館にて、故藤本和貴夫先生（大阪大学名誉教授、元大阪経済法科大学学長、大阪日ロ協会理事長）を偲ぶ会が、関係団体有志の呼びかけで盛大に開催されました。ロシア史の研究者であり、30年以上続く日ロ極東学術交流やロシア東欧学会など研究者ネットワークの組織者であり、大阪大学言語文化部の創設や大阪経済法科大学の教育充実に行政手腕を発揮、大阪日ロ協会、シベリア抑留者支援・記録センター、日本ウラジオストク協会などの社会活動にも熱心に取り組んだ藤本和貴夫先生の幅広い活動を反映して、学者・研究者仲間のみならず、藤本先生の人柄に触れた多くの方々が参集しました。

遺影への献花と黙祷で始まった偲ぶ会は、和田春樹・東京大学名誉教授、山垣真浩・大阪経済法科大学学長がまず追悼の言葉を述べ、伊東孝之・早稲田大学名誉教授の献杯、食事・歓談へと進みました。歓談中も多くの方々から思い出が話され、お酒が好きで人と話すのが好きだった藤本先生らしい、賑やかな偲ぶ会となりました。



なお、偲ぶ会を機に、60名余りの方々から追悼文が寄せられ、当日、立派な小冊子となって参加者に配布されました。

「憂慮する歴史家の会」事務局長として、ロシア・ウクライナ戦争の早期終結を願い、最後まで活動された藤本先生の遺志がいまだ実現していないことが心残りですが、先生の活動をそれぞれが各方面で引き継いでいく思いを新たにしたい偲ぶ会でした。

文化交流の灯を消さない

—「ロシア語映画発掘上映会」20回の軌跡—

守屋 愛 (『ロシア語映画発掘上映会』主宰者)

三年前の静かな幕開け

『ロシア語映画発掘上映会』は、新年 1 月 10 日の開催をもって、記念すべき第 20 回を迎えることとなりました。

最初の上映会を催したのは、今からちょうど三年前、2023 年の 1 月 8 日のことです。ロシアの国立映画保存機関ゴスフィルムファンドから、ミハイル・ブルガーコフ原作、ウラジーミル・ボルトコ監督の映画『犬のハート』の上映許可を得て実施したのが、すべての始まりでした。初めて上映会を手がける緊張感、お客様がくるのだろうかという心配、ロシア映画の上映が批判の対象にならないだろうかという不安。そうした当時の感覚は、今でも昨日のように思い出されます。もちろん、その時は、この試みが定期的な上映会としてこれほど長く続いていくとは、まったく想像もしていませんでした。

始まりは、極めて個人的な衝動に突き動かされたことでした。自分は映画に日本語字幕をつけることができる。上映にちょうどいい施設が借りられる。権利元に許可をとれば、上映もできる。「すべてそろっている。とにかく一度やってみよう」。そんな思いが、私を突き動かしたのです。上映権の申請から、字幕制作、会場の手配、広報活動、そして当日の運営に至るまで、すべてを自分で行うことになる。その大変さを漠然と想像はしましたが、それでも迷いより先に体が動いたのです。

この上映会を始めた背景には、私たちが直面した、日本でのロシア文化を取り巻く状況の急激な変化がありました。2022 年 2 月のロシアによるウクライナ侵攻、続くロシアへの経済制裁といった情勢の激変によって、ロシア映画の配給もほぼ完全に途絶えました。日本の映画館や映画祭のラインナップから、ロシアの名が消えていく。目筋だったロシア映画の公開は延期になり、中には公開見送りとなったものもあるといいます。以前から関わっていたロシア映画祭も開催の見込みはなくなりました。スクリーンからロシア語の響きが消えていく。私はどこか現実感のない、深い喪失感を感じていました。

私にとって、ロシア映画が観られなくなるということは、単に娯楽の選択肢が減るという次元の話ではありません。長



年、ロシア語・ロシア文化を専門とし、ロシア語を大学で教える傍ら、翻訳や字幕制作を仕事としてきました。とりわけロシア語映画の字幕翻訳の仕事は、従事している人が少ないことから、仕事の対象である以上に、自分の社会的存在意義が実感できる、かけがえのない活動だったのです。

その活動の機会が突然失われたとき、私の中にぽっかりと大きな空白が生まれました。いつか状況が改善し、誰かが再び橋を架けてくれるのを待つという選択肢もあったでしょう。ですが、私は待つことができませんでした。自ら上映会を企画するという行為は、冷静な判断の結果というよりも、その耐えがたい空白をどうにかして埋めたいという衝動に近かったのだと思います。

字幕という職人的仕事

私にとっての「映画との関わり」の核心である、字幕制作という作業について少しお話しします。字幕制作は、かなり時間を必要とする、極めてストイックな仕事です。一つひとつの台詞を辞書的に訳すだけでは、到底字幕にはなりません。その人物の性格、置かれている状況、感情の揺れ、沈黙の意味、そしてカットの視覚的な要素までを考慮しながら、日本語として最良の形を探っていく必要があります。

しかも、基本的に表示時間 1 秒につき 4 文字と、限られた中で、どの言葉を残し、どの言葉を削るのか。もっと良い言葉はないか。この判断の積み重ねが、字幕の出来を左右します。言葉の背後にある広大な文化的前提や時代背景をどう扱

うかも、いつも問題になります。説明しすぎれば字幕が重くなり、削りすぎれば意味が薄っぺらになり、大切な意味が伝わらない。どちらも映画の作品そのものを損なってしまう危険があります。そのぎりぎりの線を探り、セリフをひとつひとつ積み重ねていく作業は、私にはひと針ひと針編み物を編んでいくような、静かで地道な充実感に満ちています。

昔の私はそうやって字幕を完成すれば満足していました。ですが、時を経て、今の私は字幕制作の完結に、もうワンステップが欲しくなりました。上映当日、大きなスクリーンで映像と字幕が重なり、観客の皆さんの反応や会場を包む空気を感じてこそ、初めて「字幕が生きる瞬間」を実感できるのです。上映会で、私はいつも会場の端に座っています。それは作り手として作品を見届けるためでもあり、同時に観客の一人として、皆さんと映画に反応する感情を共有したいと願っているからなのです。

支えてくれる手と、広がるコミュニティ

いわば孤独な情熱から始まった上映会でしたが、当然ながら私一人の力では、これほど続けられませんでした。協力してくれるすべての方に感謝してやみません。

まず、強力に支持してくれた家族の存在があります。精神的のみならず、経済的にも許容してもらえるのは、やはりありがたい環境です。それだけではなく、実は二人の子供が技術的な面で強力な助っ人になっています。字幕制作は、前述した翻訳作業に加えて、技術的な要素も大きな割合を占めています。ひと昔前はタイミング調整は別の人がやり、翻訳者は本当に翻訳をするだけだったようですが、私の場合はタイミング調整ももちろん自分でやりますし、上映会の主催となってからはデータ管理、上映環境に合わせた形式変換といった、高度な技術も要求されています。この点に関して、私はとても運が良かったとしか言えません。すでに成人した二人の子供は、どちらも IT が専門で、アナログ人間の私からすればまるで魔法使いのように、すべての超難問を解決し続けてくれています。

とはいえ、アナログの世界もとても大切です。上映会当日の運営には、なんと言ってもマンパワーが必要です。会場準備、受付、機器の操作、来場者への対応。これらを献身的に手伝ってくれているのは、大学の元教え子たちです。すでに社会人となって、忙しいにもかかわらず、上映会のたびに集まって、力を貸してくれることは、私にとって何より心強い支えです。

集客の面でも、多くの方のお力を借りています。JIC 副会長であり、本ニューズレター編集長でもあり、ロシア映画祭 in 東京の実行委員長でもあった伏田昌義さんには、長年にわたり大変お世話になっています。ロシア映画祭 in 東京でのつながりを大切に、案内を当時ご参加くださった皆さんに届けてくださいます。また、目黒のアンナズキッチンをはじめ

めとする飲食店の皆さんが、ポスターやチラシを掲示してくださったことも、上映会を知っていただく大きなきっかけとなりました。

このように、この上映会は、外から見れば個人の企画に見えるかもしれませんが、実際には多くの人々の善意と献身的な手によって成り立っている「共同体」の活動なのです。

観客との対話で進む上映会

上映作品の選定において、私が一貫して意識してきたのは、いわゆる「定番の名作」をなぞることではありませんでした。むしろ、本国では広く知られているにもかかわらず、日本では紹介の機会を逸してきた作品、あるいは歴史の文脈に埋もれてしまった作品を「発掘」し、再び光を当てる場をつくることでした。

その代表例が、ソ連コメディ映画の巨匠レオニード・ガイダイ監督の一連の作品です。上映後の反響は大きく、「この映画を日本語字幕で観られるとは思わなかった、観られてうれしい」という声をいただいたとき、この活動の意義を改めて確信しました。

上映会が三年目に入る頃、私の中に一つの変化が生まれました。最初は「私が上映したいもの」が中心でしたが、次第に来場者や周囲の方々から寄せられるリクエストに応える形での企画が増えていったのです。マルレン・フツィエフ監督『二人のフォードル』、アンドレイ・フルジャノフスキー監督『一部屋半 あるいは故郷へのセンチメンタルジャーニー』、ゲオルギー・ダネリヤ監督『33』、ラシド・ヌグマノフ監督『針 REMIX』、今年 1 月 10 日上映の『YII - 非常事態』はすべてリクエストによる上映です。また、権利元からの提案で『1950 年代ソюзムリトフィルム制作 アニメーション特集』を組みました。

こうした過程を通じて、次第にこの上映会が主催者の一方的な発信ではなく、観客との対話によって形作られていく「場」であることを意識するようになりました。誰かの記憶や関心が次の上映を生み、その上映がまた別の誰かの記憶にまかれる種となる。もともと私の中でも、高校時代に観た『戦争と平和』や『モスクワは涙を信じない』が種としてまかれ、それが成長して今実を結んでいるのです。きっと、この上映会の種も、何十年か後に、花を咲かせ、実を結ぶと思っています。

2 月 1 日特別上映会の大きな決断

二十回という回数を重ねる中で、上映会の雰囲気も少しずつ変化してきました。初回から足を運んでくださっている方もいれば、そのときの映画に惹かれて初めて来場される方もいます。多様な動機を持った人々が同じ映画を観る。その多様性こそが、この場所の魅力です。

この上映会の今後については、正直なところ、まだ明確な

答えを持っていません。もし将来、戦争が終わり、日露文化交流が回復してロシア映画が自然に日本へ入ってくるようになったなら、この上映会の役割は変わるかもしれません。そのときか、いつの日か、私は再び一人の字幕翻訳家として、静かに翻訳の仕事に専念することになるのでしょうか。

ただ、昨年末、私にとって一つの大きな転機がありました。2月1日、現代ロシア映画の最新作『預言者 アレクサンドル・プーシキン物語』(2025年ロシア)を上映することを決断したのです。これまで旧作を中心に「発掘」してきた当上映会において、これは明らかに例外です。

昨年、この作品を自宅のモニターで視聴したとき、私は感動してしばらく言葉を失いました。ロシア最高の詩人とされるプーシキンの生涯を、ミュージカル・ファンタジーという大胆な形式で描いた本作は、現代ロシア映画の現在地を示す圧倒的なエネルギーに満ちていました。従来語り口とは大きく異なるこの作品が、日本の観客にどう受け止められるのか、不安がないわけではありません。しかし、「今、この瞬間のロシア映画の息吹を届けたい」という一心で、本国の配給会社に直接連絡を取り、上映にこぎつけました。

この特別上映会は、これまでの二十回という歩みの延長線上にありながら、同時に次の段階を示す試みでもあります。これまで旧作を通じて築いてきた観客との信頼関係があるからこそ、あえてこの「現在」を提示できる。政治的な評価とは切り離し、映画という表現でロシアをいまの時間軸の中で受け止める場をつくること。それは、ひとつの挑戦であると感じています。

結びに代えて

ロシア語映画発掘上映会は、今後も必ずしも同じ形で続いていくとは限りません。しかし、映画と言葉、そして人との出会いの中で、その時々に必要なと思える形を探りながら、この歩みを続けていきたいと考えています。

活動を知り、足を運んでくださる皆さま。皆さまの温かな関心がなければ、この灯火はとうの昔に消えていたことでしょう。この場を借りて、あらためて心より感謝申し上げます。

二十回という節目は、一区切りであると同時に、新しい問いの始まりでもあります。2月1日の特別上映会を含め、これからもロシア語をめぐる文化交流の場として、皆さまと共に歩んでいければ幸いです。会場で皆さまとお会いし、共にスクリーンを見つめる時間を心待ちにしております。

(『ロシア語映画発掘上映会』主宰者)

日ロ極東学術交流シンポジウム ロシアから7名の研究者を迎え、 大阪で6年ぶりに再開

12月13日、大阪・箕面市の大阪大学箕面キャンパスにて、第36回日ロ極東学術シンポジウムが、2019年以来6年ぶりに開催されました。

シンポジウムには、ロシア科学アカデミー極東支部のラーリン氏(歴史・考古学・民族学研究所)ほか6名の研究者が来日して参加。日本側からは、五十嵐徳子氏(京都外国語大学教授)、雲和広氏(一橋大学教授)、藤原克美氏(大阪大学教授)らが討論に立ち、活発な意見交換を行いました。

ロシア側の参加者と報告テーマは以下のとおりです。
イサエフ・A・G(ロシア科学アカデミー極東支部・経済研究所)「ロシア東部地域開発政策：現状と展望」
マジトワ・M・G(同支部・経済研究所)「日露貿易経済関係：新たな現実」

バルダル・A・B(同支部・経済研究所)「ロシア東部の交通網：国際関係の発展の見通し」

ラリナ・L・L(同支部・歴史考古学民族学研究所)「現代ロシアの若者の価値観について」

クラディン・N・N(同支部・歴史考古学民族学研究所)「考古学・人類学分野における日露共同研究」

ポズニャク・T・Z(同支部・歴史考古学民族学研究所)「19世紀末から20世紀初頭のウラジオストクにおける日本人」

新型コロナとウクライナ戦争で日ロ間の人的交流や学術交流は長らく途絶えていましたが、このシンポの再開を機に、交流の再活性化を期待せずにはおれません。なお、シンポジウムの内容は近々に日本語・ロシア語の報告書として刊行される予定です。

以下は、JIC 岡本によるシンポ参加報告記です(編集部)

● 極東学術シンポジウム報告

岡本健裕 (JIC 大阪)

大阪大学箕面キャンパスといえば、粟生間谷(あおまだに)の急斜面を息を切らせて登った先、...だったのは、もう5年近く前の話。今の箕面キャンパスは、千里中央の隣駅「箕面船場阪大前」を降りてすぐ、直結と言ってもいいくらいの交通至便な場所にあります。ここが、かつての大阪外国語大学の伝統を受け継ぐ名門、阪大外国語学部の新しい核心部です。

2025年12月13日、当地で開催された日ロ極東学術シンポジウムを聴講してきました。2019年を最後に、新型コロナや戦争でしばらく途絶えていたのですが、今回久しぶりに再





開されたのです。

<会場の人びと>

受付では京都外国語大学の五十嵐徳子先生が素早く私を見つけて声をかけてくださいました。ほとんどアポなしで押しかけたのに、私も先生方からだいぶ認知されるようになったものだと、うれしくなります。

会場に入ると「サカモトサン」と呼びかけられました。声の主は島根県立大学のワジム・シローコフ先生です。シローコフ先生は、私が JIC で頭が上がらない先輩である小西さんの恩師で、つまりもっと頭が上がらないお方です（でも名前は後で訂正しておきました）。

遠目には一橋大学の雲和広先生、大阪大学の藤原克美先生、新潟大学の道上真有先生の姿も見えます。道上先生と私は大阪で知り合ったのですが、共通の友人にウズベキスタン大使館の畑野真也さんがいて、互いに同時期にモスクワで留学していた縁があります。

ロシア側からは、ロシア科学アカデミー極東支部から数多くの研究者が参加されました。ざっと見渡すと、在大阪ロシア領事館からエレナ・シュベツォワ領事、紀田馨・大阪府議会議員、大阪大学のヨコタ村上孝之先生、朝日新聞の記者さんも来られているようでした。

<シンポジウム>

場内の使用言語はロシア語および日本語と案内されていましたが、実態は 8 割方ロシア語で進行されました。というのも、上記の通り発表者が全員ロシア人研究者だったからです。私としては久しぶりに早口のロシア語の洪水に飛び込んで、さびつきそうなロシア語力にどうにか油をさしたような格好になりました（日本語訳のレジュメにもずいぶん助けられました）。

ニコライ・クラディン氏が、考古学・人類学分野の日露協力について発表されているとき、投影されたスライドの写真の中に見つけた顔があることに気づきました。間違いなく、あれは函館大学の安木新一郎先生の若き日の姿です。安木先生と私は大阪で知り合ったのですが、共通の友人にウズベキスタン大使館の畑野真也さんがいて、互いに同時期にモスクワで留学していた縁があります（このくだり 2 回目）。



さらに言うと安木先生の奥様も、私や畑野さんと同時期にモスクワに留学していた直接の友人関係にあります。畑野さんの顔が広いのか、それとも世界が狭いのか、おそらく両方でしょうが、おかげで初対面のクラディン氏のことが一気に身近に感じられてきます。

旅行会社の人間として、興味深く聴いたのはアンナ・バルダリ氏による、ロシア東部の交通複合体と国際関係の発展の展望についての発表です。ロシア極東の国境ということになり、とりもなおさず対中国、対北朝鮮、対モンゴルということになり、日本人の通過はかなり少ない国境ばかりなのですが、こういう場所の手配こそ、私達 JIC のような専門旅行会社の腕の見せどころです。

バルダリ氏の発表は人流ではなく物流を扱うものだったのですが、アムール川に新しく架かった 2 本の橋（ブラゴベシチェンスク-黒河、ニジネレーニンスコエ-同江、いずれも対中国）の実態や、北朝鮮国境の率直な現実が議論される大変おもしろいものでした。

この発表のあとで、バルダリ氏との討論者を務められた新潟県立大学の新井洋史先生に声をおかけしました。ありがたく頼らせていただいた日本語訳のレジュメ、これはそれぞれ討論者が用意されたものなのかが気になったのです。すると、この訳は自動翻訳に若干手を加えて、全員分まとめて用意されていたものだという答えでした。なるほど、ところどころ違和感のある翻訳があったのはそのせいかな...。しかしこの分量、この水準をほぼ自動で用意できてしまうんですね。参りました。

<場外>

不思議な巡り合わせで、青山学院大学の羽場久美子先生と、シローコフ先生、そして私の 3 人でランチを一緒にしました。シローコフ先生のゆったりとした巻き込み力に、近くにいた羽場先生と私がふんわりと捉まって、気がついたらみんな、駅前の図書館併設のカフェに座っていたのです。これが滅法楽しかった。お話しをしていると、だんだん世事を離れて時間の流れが変わるような錯覚が生じるのです。そしてこの日、私のロシア世界はまた少し狭くなりました。これは錯覚じゃなく、確かなことです。

関西ロシアサークル連合会の クリスマスパーティ (12月20日) 50名以上の参加で大盛況

小原 浩子 (JIC 大阪)

12月20日(土)、関西ロシアサークル連合会のクリスマスパーティが、大阪市内で50名以上の参加者を集めて開催されました。このパーティは、京都日ロ学生交流会「アケアン(OKEAH)」と関西大学ロシア語サークル「ペチカ」、大阪大学ロシア語サークル「ラスヴェート」の3団体が、関西ロシアサークル連合会として共同で実施したものです。

12月初めにInstagramでフォローしていると、関西のいくつかの大学のロシアサークルでクリスマスパーティの案内が一斉に出ていたので興味をひかれました。「学生ではないが参加できますか?」と聞いてみたところ「JICの方ならぜひどうぞ!」と快く参加OKいただきました(実は、担当者がJICの旅行・留学イベントの参加者で、JICをよく知っている方だったのです)。

参加にあたりパーティ参加者のLINEグループに登録したのですが、私の後もどんどん参加者が追加され、パーティ当日には50人を超えるメンバーが登録されていました。

当日の会場は、大阪・鶴橋にあるビル5階の貸しスペースでした。小学校の教室の1.5倍くらいの広さで、バーカウンターと音響設備が備わった黒塗りの部屋です。通常はアーティストのライブなどが行われている場所のようです。

受付にいたのは京都日ロ学生交流会「アケアン(OKEAH)」の会長で関西ロシアサークル連合会の代表でもある中島さん。京都の「アケアン」は2年前から活動を始め、京都産業大学や京都大学、同志社大学、立命館大学のロシア語を学ぶ学生がメンバーとなって、モスクワ国際関係大学 MGIMO Japan Club との日本語・ロシア語会話クラブ『日露会話クラブ』の活動や、在日ロシア人との交流イベントを行っていると話してくれました。

パーティの参加者は、見たところ日本人7、外国人3ぐらいの割合でした。外国人はロシア人だけでなくキルギス人や中国人、韓国人などもいたので、実際はもう少し外国人割合が高かったかもしれません。

パーティ参加費は1500円で、主催メンバーの手作りブリュイ(ロシア風クレープ)や飲み物が用意されていました。事前のLINE連絡で「飲み物持ち込み可」の案内があり、参加者はジュースやお酒を各自持ち込んでいました。私はジンジャーエールを持ち込みましたが、ロシア人学生の中にはウ



オッカを2-3本持ち込んでいる強者も見かけました。

17時過ぎに主催メンバーの開会の挨拶でパーティが始まりました。会場利用の注意事項と当日のスケジュールが伝えられ、それを隣のロシア人メンバーがロシア語に通訳し、参加者全員に伝えられました。

最初のうちは知り合いどうして固まったり、所在なげにしている学生もいましたが、主催メンバーがお互い知り合いになれるよう後押しして雰囲気を作っていました。参加者の中にはロシア語は第2外国語でそれほどやっていない学生や、ロシア語とは関係のない学生もいましたが、ロシア語をやってもいなくてもロシアに興味のある学生が気軽に参加でき、ロシア語圏の人たちと交流できるオープンな雰囲気がとてもよかったです。

1時間半程度の歓談の後、手作りクリスマスケーキの企画が始まりました。スポンジ台にホイップクリームを塗り重ね、その上にチョコやジャムなどでデコレーションする簡単なクリスマスケーキでしたが、参加者が工夫しながら和気あいあいと作っていました。味はまあまあ、でもすてきなクリスマスケーキの出来上がりです。その後はプレゼント交換ゲームで盛り上がり、最後はロシア人のパーティでは定番のディスコタイムとなりました。日本の曲やロシアの曲で、全員が音楽に合わせ思い思いに体を揺らしました。最初は見ていただけだった学生も、みんなであつながつて踊るうちに、楽しげにリズムを刻むようになりました。

17:00 開始 21:30 終了という長時間のパーティでしたが、話をしたり踊ったりしているうちに、あっという間に時間が過ぎました。最後に主催メンバーがあいさつし、全員での写真撮影の後パーティは終了となりました。

50人以上の大パーティを成功させた関西ロシアサークル連合会の活動は、ウクライナ戦争で日ロ交流が中断状態にある中でも、ロシア語を学びロシアに関心を持つ学生たちの交流意欲が決して衰えていないことを示しており、とても勇気づけられます。今後とも学生ロシアサークルの様々な活動に注目していきたいと思います。

第 33 回創価大学ロシア語スピーチコンテスト

出場者の実力がレベルアップ

優勝者にJICから賞品を提供

岡本 健裕 (JIC 大阪)

2025 年 11 月 29 日 (土)、創価大学で開催されたロシア語スピーチコンテストに、今回も出席してきました。私達 JIC はこのコンテストの協賛企業として、優勝者に賞品を提供しています。

今回の出場者は、エレメンタリー部門 7 名、スタンダード部門 5 名、スタンダード・ビデオ部門 4 名の計 16 名でした。

各部門とも 3 位まで表彰され、さらにエレメンタリー部門には特別賞も授与されます。JIC からはスタンダード部門優勝者に賞品として、オンラインロシア語研修 (サンクトペテルブルグの語学学校での 16 レッスン) を贈呈しています。

前回まで、特別賞はエレメンタリー部門ではなく、スタンダード部門とスタンダード・ビデオ部門の方にあつたのですが、部門ごとの出場者数の実態を勘案すると、今回の調整でより適切なバランスになったと言えるでしょう。

審査員は、上智大学の村田真一教授を審査員長に、スヴェトラーナ・ラティシエワ (上智大学教授)、岡田邦生 (ロシア NIS 経済研究所元所長、モスクワ・ジャパクラブ前事務局長)、道口幸恵 (ロシア語通訳協会前会長、会議通訳者) の各氏が務めました。

<エレメンタリー部門>

出場者 7 名のうち高校生が 2 名いて、勇気ある若者の挑戦の門として、エレメンタリー部門の存在感はもはや不動のものとなっています。当部門では、スピーチは主催者が用意した同じ課題文を暗唱し、その後質疑応答を受ける形式で、このシステムもすっかり定着したと感ずります。

今回、何も見ずに最後まで暗唱を成功させた方が 4 名、カンニングペーパーありで乗り切った方が 2 名、カンニングペーパーなしで頑張ったものの時間内に暗唱を終えられなかった方が 1 名でした。半分近い方が暗唱に成功しなかったことになりませんが、どんなに入念に練習していても本番で真価を発揮できないことはあるものです。立ち往生しようとも、挑戦する勇気こそが尊い。これからも奮って参加あれ!

エレメンタリー部門の 1 位は上智大学の井橋奈々 (いなし・なな) さんでした。井橋さんの暗唱は涙が出るほどすばらしかった。単に暗唱するにとどまらず、課題文の登場人物を的確に演じ分けていたのです。「ロシア語で演技ができる」とい



う域に達していたのは、この部門では彼女だけで、相当練習を重ねたのだらうと推察します。質疑応答も抜群に美しく、言葉が溢れ出るというのがふさわしいやり取りでした。井橋さんはすでに、ロシア語を憶えるという段階を超え、ロシア語で考えることができているのでしょう。

2 位は創価大学の松川涼香 (まつかわ・りょうか) さんでした。松川さんは暗唱に淀みがなく、終始にこにこしながら楽しそうにスピーチをしていたのが印象的でした。質疑応答にもしっかりした答えを返して、彼女は必ず 2 位に入賞するだろうとわかりました。

3 位は創価大学の柳心優 (やなぎ・みひろ) さんです。柳さんは少々つかえた箇所もありましたが、2 位に迫る内容のスピーチと質疑応答で、3 位入賞は当然のことと感ずります。

特別賞は関東国際高校の岡本英寛 (おかもと・ひでひろ) さんでした。岡本さんのスピーチは、淡々としていながらも耳に心地よく、確かな記憶で最後まで話し切っていました。また質疑応答でも窮することなく答えることができていました。将来が楽しみです。

今回は、1 位が超エレメンタリー級と言ってもいいくらいの実力者だったのですが、このように出場者の力の振れ幅が大きいことこそが、エレメンタリー部門らしさであり、魅力でしょう。出場者同士でも、大いに刺激を受け、励みになるはず。また、特別賞がエレメンタリー部門に移設されたこともよかったです。高校生の岡本さんの挑戦に、ふさわしい賞で報いることができたからです。

<スタンダード部門>

スタンダード部門は、出場者がオリジナルのスピーチを用意し、制限時間内に暗唱したのち、質疑応答をする形式です。

今回は、出場者の実力の平均値が前回よりも大きく上がっていることを感ずりました。まずほとんどの方が暗唱を最後まで完了できたこと、そしてスピーチのテーマと内容にそれぞれ光るものがあったこと、さらに皆が質疑応答に食欲に食らいついて、時間がかかっても言葉を探しながら納得いくまで答えていたことです。

スタンダード部門 1 位は、創価大学の須藤優一 (すどう・ゆういち) さんでした。須藤さんはゲームを通じてロシア語

を学んだ経験と、大学で出会ったロシア人の友人との交流から得た気づきをテーマに、人が互いに理解することの大切さを訴えました。特に" ...именно сейчас нужно понимать эту страну. Не через телевизор и новости, а через прямой диалог и личное общение." (まさに今、この国を理解する必要がある。テレビやニュースを通じてではなく、直接的な対話と個人的な交流を通じて) という一節は、まったく私達JIC と思いを同じくするところです。須藤さんはロシアを訪れることを夢見ているとのこと。ぜひ実現してください。心から応援いたします。須藤さんにはJIC から賞品を贈呈いたしました。



スタンダード部門の2位は創価大学の柳井正勝（やない・まさかつ）さんでした。柳井さんは前回、スタンダード・ビデオ部門に出場し3位を獲っています。今回はアゼルバイジャンのシェキへ訪問した際に、現地の博物館の館長と意気投合した体験談を語ってくれました。この内容が非常に興味深かったのはもちろんですが、おもしろかったのは質疑応答の際に「なぜアゼルバイジャンへ行くことを決めたのか」という質問に対して、「アゼルバイジャンの国歌と、АзССР（アゼルバイジャン社会主義共和国）の国歌が好きだから」と答えていたことです。これには思わずにやりとしました。たいへんマニアックでよろしい。

3位は社会人のネルソン久怜（ねるそん・くれい）さんでした。ネルソンさんは高校卒業後、ロシア語ゼロの状態でウラジオストクからロシアを3ヶ月かけて横断する旅をし、途中、コミ共和国のノーシュリ（Нощуль）村の友人宅で2週間滞在した体験を語るという、少々ぶっ飛んだ内容のスピーチで、個人的には断トツで興味をそそられました。少々残念だったのは、スピーチを最後まで話し切ったものの、制限時間を若干超過してしまったことです。しかし、彼のロシア語はテンポよく滑らかで、普段からよく使い込んでいるであろうことが想像できます。異色の経歴と行動力を持つ彼が、これからますますロシアへ深く入り込んで、知る人の少ないロシアの断面を見せてくれることを期待します。

また今回、賞は逃したものの、印象に残ったのは上智大学の高橋由風（たかはし・ゆな）さんです。高橋さんは前回のスタンダード部門で2位を獲っています。今回はボリス・ゴ

ルバートフというソ連の作家が、日本の被差別部落問題を題材にした短編小説を書いていたこと、水平社博物館訪問をきっかけにゴルバートフを研究し始めたことを、スピーチに仕立ててられました。ほとんど知られていないソ連の作家の意外な業績に少しずつ迫っていくさまは知的刺激に溢れていました。その内容の濃さゆえか、惜しくも時間切れでスピーチを最後まで話し終えることができませんでしたが、質疑応答では水平社設立者の一人である西光万吉やシベリア抑留者向け新聞（日本新聞）などにも触れながら果敢に多くを語り、研究者魂の発露を感じました。

＜スタンダード・ビデオ部門＞

スタンダード・ビデオ部門では、出場者はオリジナルのスピーチをあらかじめ録画した動画を提出していて、審査も先に終わっているという点が、他の部門と大きく異なっています。この部門ができたことで、遠隔地からも参加がしやすくなりました。また、このビデオ部門を会場で上映している間に、舞台裏ではエレメンタリー部門とスタンダード部門の審査を同時に進めることができるなど、メリットがたくさんあります。

一方、ビデオは失敗しても撮り直しが可能で、質疑応答もできません。この点で、本番の緊張感や当意即妙さを失うところがどうしてもあります。一長一短というわけですが、このビデオ部門によって、ロシア語スピーチコンテストが新しい参加者の獲得に成功していることは確かです。

スタンダード・ビデオ部門1位は神戸市外国語大学の徳山桃香（とくやま・ももか）さん。2位は大阪大学の渡戸愛梨（わたど・あいり）さん。3位は筑波大学の柴田葵（しばた・あおい）さんでした。

どなたも落ち着いた話し方の聞き取りやすいスピーチで、実力の高さをうかがい知れるものでした。次はぜひ対面の部門にも挑戦いただきたいです。

＜審査員長講評＞

今回は、上智大学の村田真一先生が初めてコンテストの審査員長に就かれ、次のような講評をくださいました。

「昔に比べるとみな上手になっています。さらに上達するならば、歌を歌って拍をつかんだり、演劇で細かい発音を体得するのがお薦めです。また、古典を読み込んで使えるフレーズを吸収しましょう。50年前に朝日新聞主催のロシア語スピーチコンクールに出たときは私もガチガチに緊張しました。演劇を通じて親交のあった俳優の仲代達矢さんも本番前にはいつもブルブル震えて緊張していたのです。プロでもあがるのだから、忘れたり、時間オーバーしても気にしないことです。」

演劇人であられる村田先生のお話を聞いていると、かつてJIC でアルバイトをしていた上智大学のある学生さんが、先生の指導のもとですばらしいロシア語劇を演じていたことを

思い出しました。彼はお酒にまつわる失敗談には事欠かない学生だったのですが、その彼が、舞台では、まるでロシアからそのまま連れてきたような酔っ払いのオッサン役となって無類の輝きを放っていたのです。適材適所とはよく言ったもので、このとき村田メソッドの効果のほどをまざまざと見た私は、先生の講評がすんなりと腑に落ちたのでした。

<交流会>

コンテスト終了後は、創価大学ロシアセンターの部屋にて、恒例の交流会が開かれました。この交流会は、出場者や審査員、観客やスタッフが誰でも自由にお茶やお菓子をいただきながら歓談できる、打ち解けた雰囲気の間です。

今回もまた JIC に若干のアピールの時間をいただいたので、改めて自分たちのことを紹介し、今すぐ申し込めるロシアや中央アジアへの留学プランを宣伝してきました。以前お渡ししていた賞品はモスクワ往復航空券だったことをお話しすると、驚きの声が漏れました。今のロシア語学習者にとって、やはりロシアは遠くなっているようです。

本当は、私達は今でも、優勝者には航空券を受け取ってもらって、ロシアへ行ってほしいのです。数年前まで、スタンダード部門の出場者の多くはロシア留学経験者でした。しかしその伝統は新型コロナ流行と戦争によって断絶し、前回のコンテストでは、出場者の大半が、海外渡航そのものが未経験で挑戦する状況にまでなっていました。

今回はロシア、カザフ、ウズベキスタン、アゼルバイジャンなどロシア語圏への渡航・留学経験者が何人かおられたように見受けられ、それははっきりとコンテストの質的な向上に現れていたように思います。

ウズベキスタンといえば、今回は聴衆の中にウズベキスタン大使館職員の畑野真也さんの姿がありました。彼は私の個人的な友人でもあるのですが、この日は大使館の仕事があったところを、早めに切り上げて駆けつけてくれたのです。これからもロシア語圏の留学先として有力な候補であり続けるであろうウズベキスタンのことなので、畑野さんをホストである創価大学の江口満先生に引き合わせて、名残惜しく会場を後にしました。

<後日談>

後日、長らくこのコンテストの審査員長をお務めになった中澤英彦先生から私に丁寧な挨拶状が届きました。中澤先生曰く、コンテストが土曜日開催に変わってからどうしても出席ができなくなり、今回は村田真一先生にご依頼なされた由。そのような事情も知らず、去年は先生に会えないことを勝手にさびしがってこの紙面でぼやいてしまいました。先生、すみませんでした。

ロシア語長期留学4月生・募集中



オンライン
相談 受付中!

期間：2026年4月1日より10ヶ月

締切：2026年1月14日

※ウラジオストク極東連邦大学の締切は12月13日

モスクワ国立大学 1,590,000 円(授業料 10ヶ月)

サンクト・ペテルブルグ国立大学 1,155,000 円(授業料 10ヶ月)

ゲルツェン教育大学 998,000 円(授業料 10ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 420,000 円(授業料 10ヶ月)

ペラルーシ国立外国語大学 422,000 円(授業料 10ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などがかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です！
(中央アジア、バルト諸国など)

◆JIC ロシア留学デスク◆

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日 9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要 事前予約)

◆◆編集後記◆◆

▼本号は、新年恒例のスタッフあいさつを中心に編集しました。ロシア旅行・ロシア語留学・日ロ交流に取り組む JIC スタッフの意欲はまだまだ健在です。▼ウクライナ戦争の終わりはまだ見えません。停戦交渉の1日も早い進展を望みます。と、ここまでは1年前とほぼ同じ書き出しになりました。▼しかし、年初の米トランプ政権によるベネズエラ侵攻以来、隣のコロンビア、キューバ、そしてイラン、グリーンランドと、世界は100年以上前の荒々しい帝国主義時代に戻ったかのように、俄かに雲行きが怪しくなってきました。アメリカ、ロシアと2つの核超大国が、国際法を無視して腕力に任せたやりたい放題を始めたら、どうなるか。▼20世紀に膨大な犠牲を払って積み重ねられた国際秩序が崩壊の危機に瀕している今、私たちはこの世界で何ができるのか、何をしなければならぬのか、深く考えないわけにはいきません。確かな「解」は見えませんが、この重い課題をともに考え、自分たちの活路を見出す1年にしたいと思います。本年もよろしくお願ひいたします。(F)